

大蔵大臣とお金

大蔵大臣という言葉は、何かしら古典的な魅力と重さを感じる言葉である。明治維新から明治十八年までは大蔵大臣のことを大蔵卿といていた。明治十八年内閣制度が新しくできて、時の大蔵卿松方正義公が、初代の大蔵大臣に親任された。それから今日まで四十数人の大蔵大臣が、入れ替り立替り、わが国の財政を担当してきたのである。

大蔵大臣は昔も今も内閣の重鎮である。副総理格のポストである。輝しい、重いポストである。誰でも一度はやってみたいと思う魅力のある役柄である。国の財政の元締であり、事実上財界を支配する絶大なる権力を掌握し、同時に国民の生業や生活に至大なる支配力をもっている公職である。

仮りに大蔵大臣に人を得ず、勝手気儘にこの絶大なる権力を行使されたとしたならば、国民としてはまことにたまったものではない。尤も、近代国家の財政である以上一応、憲法、予算、

財政法その他の財政金融法令によつて、大蔵大臣の権限が濫用されないように規制されてはいる。国権の最高機関である国会の監督も勿論つけてはいる。それにしても、大蔵大臣に任せられた権限は、非常に大きいわけである。予算の実行、税法の執行、国家資金の運用、金融調整の実施、貨幣法の運用、国有財産の処分その他数えれば限りがないが、こつう重い行政に対する最終的の決定権をもっているわけだから、蓋し、その権力は絶大なものである。

しかし、それだからといつて国民は別段心配する必要はない。大蔵大臣は、自ら進んで自分の権力を行使するようなことは殆んどないからである。大蔵大臣のやる仕事は大抵の場合、受身であるか、或は他人のやつたことに対する後始末であるか、どちらかである。積極的、能動的に権力を行使することは稀である。彼は進んで金を出すようなことは殆んどないのである。天災地変が起つた場合には、逸早く、その復旧費の要求を受ける。財界に恐慌が起つた場合には、先ず第一にその善処を責められる。貿易の不振、物価の騰貴、生活の困窮、財界の不況、失業の増加等、凡ゆる問題が持ち上げれば、結局、大蔵大臣に対してこれを何とかしろといつて国民から追い立てられる。そうかといへば、結核の増加、教育や文化施設の貧困は、大蔵大臣が財布の紐を締めすぎるからだといつて非難を浴びる。一方では、税金は重い、苛酷に過ぎる

という苦情が大蔵大臣に集中する。つまり、国家活動一般についての後始末役であり、苦情承り役であるといった恰好である。かくて、大蔵大臣は政府部内はもとより、国民一般からせき立てられて、これに消極的な抵抗を試みつつ、しぶしぶ金を小出ししているわけである。世の中に「貧乏くじをひく」という言葉があるが、まさに、これは大蔵大臣にあつらえ向の言葉である。

ところが、一旦腹を決めて、大蔵大臣がこうやると言えば、その通り金が出るのである。各省の大臣では、ああもしたい、こうもしたいと言うことはできても、実弾が必ずこれに伴うわけではないから、その言葉は結局空念仏になり勝ちであり、世間も又それを信用しない怨みがある。大蔵大臣には、空念仏ということはない。それだけに彼の言うことには権威があり、決定力があるわけである。いわば、彼の権力は消極的ではあるが強いのである。又彼の意見は、財政を通じて国政全般の見透しと均衡の上に立つた全局的な判断になるのである。局部の利害に関連する主張は、一見具体的で強いように見えるが、実は実践性に乏しい概念論になる虞れがある。判断は全局的であつてはじめて実践的になるものであるから、大蔵大臣の主張は強く且つ実践的であるわけである。

大蔵大臣のところには、お金が幾らでもあるから、嘘、難儀はないだろうとよく言われる。ところが、大蔵大臣ぐらい金に恵まれないポストはないわけである。大蔵省が贅沢をすれば各省がそれに便乗する恐れがあるというので、先ずもって自肅しなければならぬ。昭和二十年、私は津島蔵相に随行して伊勢神宮に参拝した。偶々、下村陸相と神宮で落ち合った。秘書官同士で幣帛料を打合せたところ、陸軍では二百円と決っていて、しかもそれが役所から出るという。大蔵省では百円と決っていて、大臣のポケットマネーから捻出することになっている。このように、他の省では機密費や接待費が潤沢であったが、大蔵省は遠慮するという始末である。又金融機関はもとより凡ゆる民間事業で、彼の権限に接触していないものはないから、彼自身を持つことに厳正でなければならぬ。一言隻句もゆるがせにしてはならない。金に一番縁のある公職をけがして、しかも金を身につけることができない役目である。換言すれば、金に一番縁のある公職をけがしているから、自らの金には不自由をする役柄だという方が適切であろう。妙な譬えではあるが大蔵大臣というのは、産婦人科の御医者さんのような役柄である。

大蔵大臣は又非常に忙しい。大臣の主要な仕事の一つは毎週二回の閣議であるが、この閣議に提案審議される案件で大蔵大臣の仕事に関係のないものは一つもないといつても差支えない。だから、彼は、他の所管大臣全部を併せた程の勉強をしなければならない。又一つの省への陳情は、殆んど自動的に大蔵省にやってくる。従つて彼は他の大臣に数倍する程の訪客と面接しなければならぬ。国会の委員会は、各委員会とも大臣の出席を要求してくる。他の所管大臣であれば一つか二つ、せいぜい三つの委員会程度に出席すれば足りるが、大蔵大臣は、予算委員会と大蔵委員会との立役者である許りでなく、一切の委員会から呼出を受けるのである。体が幾らあつても足りない始末である。

大蔵大臣の仕事は、たしかに多方面にわたつてゐるが、つまるところ、お金の価値を維持するといふことが、その心棒になつてゐる。私は政治のうちで何が一番大切なことであるかと聞かれたら、即座に、「それは貨幣の価値を維持することです」と答えるであらう。一國の政治や経済はもとより、更に進んで國民の生活や思想を安定させるかさせないかの一番大きい支柱は、何といつてもお金の値打が安定するかしないかにかかつてゐるといつても過言ではない。今日の世の中の秩序を維持している柱は貨幣の価値である。一旦この貨幣価値が崩れはじめ

と、經濟の秩序は安定を失い、國民は血眼になつて利を漁つたり、保身に浮身をやつすことになる。國民の道義もまた弛緩して、正直者が馬鹿を見ることになる。このことはひどいインフレの下で、われわれがいやという程見せつけられに現象である。インフレという病氣は、戦争の災禍以上に、國民をむしばむパチルスであるわけだ。大蔵大臣が、寝ても醒めても、念頭を去らない関心をもっているのは、一にこの貨幣価値の安定ということである。これは重い責任である。遠い射程をもつた広い大きい責任である。

かように大蔵大臣は、重い責任、厳肅な使命を担つた役目であつて、しかも自ら享受することの乏しい役柄である。誰も自ら進んで引受けてよいような生易しい仕事ではない。出来得べくんば、お断りしたいポストであろう。又進んでやってみたいという人にはやってみなければいけない仕事であり、どうしても嫌だという人こそ、三顧の礼を以てこの公職に迎えなければならぬ重職であると言えよつ。